

# 現役大学生が知りたい〇〇〇のこと。

## 明日の自分が好きになる方法

### 第2回 誰にも勝たない「強さ」 誰にも負けない「自信」



演出、映画監督。『踊る大捜査線』TVシリーズのチーフ演出、同映画シリーズの監督を務め、日本アカデミー賞優秀監督賞を受賞。一躍人気となる。また、大のアニメオタクとしても知られ、総監督として自身初のアニメ作品『PSYCHO-PASS』を手がける。2013年から故郷香川県の『さぬき映画祭』のディレクターを務めるなど、監督業以外にも多彩な才能を発揮。他、監督作品に『サマータイムマシン・ブルース』『UDON』など。

## 誰にも勝たない「強さ」誰にも負けない「自信」

勇気。それは自分が自分らしくあるために必要なもの。

何かに対して僕が自分の意見を述べる  
とき、そこには他人の評価がつきま  
う。いつも他人の視線に気を配るあまり、  
他人が気に入る意見を探してしまい、や  
がて自分らしさを見失う。周囲の視線を  
シャットアウトし、自分らしさを貫くた  
めに、僕には相当な勇気が必要だ。

映画をはじめ、エンターテインメントの  
世界では特に、一つの発言がそのまま  
自分の「センス」としてとらえられるは  
ず。そして、センスへの評価が、その世  
界で自分が生きていけるかの勝負になる  
のだと僕は思う。映画の世界——勝負の  
世界で生きる本広監督は、自分を貫く勇  
気の生み出し方を知っているのではない  
か、そんな期待を抱きながら、僕はイン  
タビューに臨んだ。

インタビューの冒頭、本広監督は「明日の自分を好きになる」というコンセプトを知るなり、自分自身について、「自分が好きかって言うのと、今もあまり



好きではない。そんなに自信もないし……。」  
そわそわしながら、申し訳なさそうにそう語った。

これだけ結果を出し続けている本広監督が、自分に自信がない……？ 僕を含め、その場にいたメンバーの多くが驚いた。でも僕は同時に親近感を覚えた。自分に自信がないのなら、本広監督も僕と同じで、自分の意見を述べることを「怖い」と感じているかもしれない、と思ったからだ。

でも、僕の予想は外れた。他人に意見を述べることを「怖い」とは思いませんか？ と聞いてみたら、本広監督はこう答えた。

「何を怖いって思います？ 怒られるってこと？」

予想外の答えに僕は困惑した。自分に自信がないなら、「これを言って否定されたら嫌だな。」という不安も大きいはず。だとすれば、自分の意見を言うのが怖くないわけがない……そう思って戸惑ったからだ。だから、僕には本広監督が不思議がる意味がわからなかった。

僕が戸惑っていると、本広監督はさらに付け加えた。

「僕は、何かをやる時は、あの人に追いつきたい！という「敵」を必ず作ります。勿論、押井守さんとも戦いを望んでいません。押井さんが何か作ったら必ずチェックして、絶対にいいこと言わないようにしています。『押井さん、俺を助監督につけてくれればもっとよくなったのに。』って言うんです。そういう風にガツガツ行くから、上の人たちには可愛がられるんだと思います。言いたいことは内に秘めるんじゃないって、出しに行かないさ。」

敵——。本広監督は、押井守さん、さらには宮崎駿さんといった先輩たちを「敵」だという。憧れはあるにせよ、まさかライバル心を抱いているとは想像もしていなかった。

そんな偉大な先輩の前に、どうしてそんなに強気で行けるのだろうか？僕だったら委縮して、先輩の意見に沿うことばかり言ってしまうというのに。

僕は自分が大嫌いだ。自分の考えにも自信がない。サークル、ゼミといった様々なシーンで意見を出すことを求められる

けど、「こんなこと言ったらつまらないやつだと思われるんじゃないか」という不安にいつも襲われて自分を貫けなくなる。

まして目上の人、尊敬する先輩を「敵」としてぶつかっていくなんて、怖くてできるところがない。

「あんまりいろいろ考えなくても、先輩に立ち向かっていけば（その先輩には）絶対可愛がられると思うんですよ。」

と、本広監督は言う。でも、考えないなんて絶対無理だ。

立ち向かった方がいいと思う瞬間は自分でもわかる。

それでも、下手なことを言ったら先輩に否定されるのは、という恐怖が口を重くする。

自分に自信がないのに、そんなに強気で立ち向かえるのはなぜ？と何度も考

えた。けれど、僕には本広監督の言っていることがどうしても分からなかった。

もやもやと頭の中で繰り返される気持ち。ちは、「先輩と戦うにしても、自分のアイデアに勝負が見えないから立ち向かうことが出来

ない……。」

というメンパリの言葉に對して本広監督が返答した瞬間から暗れていくことになる。

「え、戦って、勝とうって思わなければいいんだよ。負けても怒られても、なんでもいいんだよ。その人の

印象に残れば。」

本広監督のこの言葉に、僕は呆気にとられた。

「戦う」って言っても、先輩の意見を否定するつもりはないです。先輩のアイデアがまずあって、それよりも面白いことを言ったり、アイデアを付け足したりする。立ち向かうっていうのはそういうことです。決して先輩の言うことにノー！は言いません。」

なるほど——僕は心の中でそうつぶやいた。本広監督の強気の理由がわかったからだ。本広監督は何も、目上の先輩を真つ向から打ち負かさうとしているわけじゃない。「負かす」のではなく「超える」。相手のアイデアを「すごい」と認めたうえで、「じゃあもっとこうしましょう。」と提案する。そこに相手への「敬意」が感じられた。相手はすごい先輩なんだから、それを否定して勝とうだなんて思わない。相手への敬意があるから恐れず迷わず立ち向かっていける。本広監督の強さは、「誰に勝つことも考えていない」ところにあると感じた。

でも、まだ足りない。先輩のアイデアをより「良い」方向に超えていく案を出す、それが本広監督のやり方なのはおかつた。じゃあ、本広監督にとって「良い」って何？僕は何が「良い」のか自信を持って判断できない。それは僕が自分

に自信がなく、自分のアイデアのにも自信がないからだ。同じように自分に自信がないはずの本広監督が考える「良い」は、どこから生まれるのだろうか？

その疑問について直接聞くことはしなかったけれど、僕はその答えを見つけたことができた。それは本広監督の若い頃についての話題になったときだ。テレビ制作会社のADをしていた当時の話を、本広監督は無邪気に話し始める。

「僕三十になつたら映画撮りますから」って当時の先輩たちにずっと言っていたの。その頃の僕はバラエティを作っていて、ドラマすらやってなかったんだけどね（笑）。でも、映画を見てきた数と、映画に関する知識ではだれにも負けないっていう自信があった。だから、それだけのことを言えた。その頃、映画の全解説みたいなのを「びあ」が出して、それを毎年買ってたんです。分厚くて十センチくらいあったんですけど、それを全部ノートに書き写していました。とにかく映画の勉強だけは誰にも負けたくなかったから。」

「だれにも負けない」——自分が嫌いだなんて言う人の口から出てくる言葉じゃないけど、数々の名作を作ってきた

本広監督のことだ、その努力を疑う人はいない。この強い言葉にこそ、「良い」の源がある。その源は「好き」の気持ちだ。濁りの無い「好き」の気持ちから、幾



千の作品に没頭し、その中で見つけたたくさんの「面白い」、それは「この作品すごい。こんな作品を作れる監督のセンスすごい。」という「敬意」だ。

僕は自分が嫌いだ。自分が何を言っても否定されるのが当然だと思っている。そのせいで傷つくことが嫌だから、すべてのことに消極的になってしまふ。実際は、否定されることは多くないとわかっているけれど、つい疑心暗鬼になってしまふ。すると次第に「周りを疑っている自分」を嫌いになっていく。そんな負の連鎖に陥ってしまう僕は、「俺はこう思う！」と自分を信じてズバズバと意見を言えて、周りを引く張っていきける人を見ると尊敬するし、少し羨ましくもなる。「あの人のように、もっと自分を信じた、自分を好きになりたい。」と。

本広監督も自分自身を嫌いだと言った。でも、たとえ自分自身を嫌いでも、映画を「好き」で見続けて、たくさんの作品からたくさんの「面白い」を見つけてきた。だから、「もつとこうすれば面白くなる」というのがわかる。「誰にも負けない」と言い切れるだけの努力は、先輩に果敢に立ち向かう本広監督を支える自信だ。

先輩への敬意があるからこそ、勝つことを考えずに食らいつき、「好き」が積み重ねた努力を自信に立ち向かう。「誰

にも勝たない強さ」と「誰にも負けない自信」を本広監督は持っている。本広監督は「好き」なものに、映画に、人に、どこまでも素直だ。好きなものに心を開き、敬意を持っているから、アイデアを臆することなく出していける。

自分を好きになるのは簡単にできそうにはない。でも、自分が好きなものに素直に「好き！」と向き合うことなら僕にだってできそうだ。「好き」「楽しい」と思った瞬間の、心が弾む音に——それがたとえ微かな音でも——耳を澄まして、その方向へただ歩いてあげれば。そうすれば、アイデアに自信を持って、飲み込んでしまふ自分を抜け出して、勇気を持って立ち向かうこともできるのかもしれない。

自分の「好き」と思えるものを探してみよう、そう思えたインタビュだった。

山西和磨（やまにし・かずま）  
明治大学文学部三年

本広監督はご自身をあまり好きではないとおっしゃっていました。ですが、どんな相手を前にしても言いたいことを飲み込むことなく、自分が良いと思うことを貫いていく本広監督の姿に、名作を作り続ける監督ならではの「強さ」と「自信」を僕は感じました。僕も自分があまり好きではありません。そんな人でも、本広監督のように自分を貫くためのヒントを受け取ってほしい、そう思いながらこの記事を書きました。